

### ラフカディオ・ハーンの間観(4)アレグザンダー・ポープをめぐって：東京大学英文科講師時代の講義録から

先川，暢郎

---

(出版者 / Publisher)

法政大学教養部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学教養部紀要．外国語学・外国文学編 / 法政大学教養部紀要．外国語学・外国文学編

(巻 / Volume)

111

(開始ページ / Start Page)

107

(終了ページ / End Page)

128

(発行年 / Year)

2000-02

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00004829>

## ラフカディオ・ハーンの間人観（4）

—— アレグザンダー・ポープをめぐって：東京大学英文科  
講師時代の講義録から ——

先 川 暢 郎

### 1. はじめに

イギリスにおいては、18世紀はエリザベス朝時代の影響が全くなくなったわけではないが、一般的には悟性の時代、啓蒙の時代であり、文学はわかりやすく、しかも、明確なものとなり、理性の優位は動かなかった。想像したりすることよりも理性主導の理解することに重点をおいた新しい文学が先ず詩の分野にあらわれた<sup>(1)</sup>。ジョン・ドライデン（1631–1700）の後を受けて、この時代の前半を代表するアレグザンダー・ポープ（1688–1744）は名誉革命の年にロンドンでリネン商を営むカトリック教徒の家庭の息子として生まれた。この名誉革命によって、イギリスはピューリタン革命とそれに続く争い——例えば、スコットランド問題、アイルランドの反乱——、宗派間（ピューリタンと国教会）や政党間（トーリー党とホイッグ党）の争いに一応終止符をうち、混乱から安定した時代をむかえた。

しかし、一方においては、この当時の動乱の余波の影響が残り、社会全体にわたって不安定な要素がみられた。とりわけ、大きな問題はイギリス国教会に属さない人々（non-conformists）に対する反感や差別である。そのために名誉革命以来勢力のおとろえたカトリックの家庭に生まれた人々は、公職につくこともできず、土地の所有を認められず、また、公立学校への道は閉ざされるといった不自由な生活を強いられるなどの社会的な差別を受けた<sup>(2)</sup>。

ポープの場合も、このために、正規の学校教育を受けることができず、知りあいのカトリック神父について短期間の勉学の手ほどきを受けただけで独学をしたのである<sup>(3)</sup>。その当時のことについてポープは次のように語っている。

神父達と縁を切って以来、ほとんど自分ひとりで本を読んだ。とりわけ、読書のなかでも、詩を読むことに熱中した。数年の間に、イギリス、フランス、イタリヤ、ラテン、ギリシヤなどの詩人の本を読んだ。これは本を読むのがただ好きでたまらなかつたからです。私は言語を学ぶために本を読んだというよりも読んだ詩人の作品のなかに物語りを求め、これによって言語を身につけた。……この五、六年間は私の生涯にとって最も幸福な時代であったと今でも思っています<sup>(4)</sup>。

このような社会的ハンディと病弱という身体的ハンディを背負っていたポーブの生涯を、創作活動の方面から見ると、ポーブは12才になるかならぬうちに『孤独に寄する賦』を書きあげ<sup>(5)</sup>、14才の頃には『アルカンダー』を書いたといわれ、18才の頃になると、後にジェイコブ・トンソン（1656-1736）によって雑誌にとりあげられて彼の詩としてはじめて活字となった『牧歌』を書きあげて詩人として本格的な創作活動にはいった<sup>(6)</sup>。

そして、10代で詩が文学界で認められたポーブは『批評論』（1711）、彼の作品の中で最も完全な作品であると絶賛された『髪毛盗み』（1712）、ロマン的で牧歌的な作品である『ウインザーの森』（1713）、さらに、彼の評判をいっそう高めた感傷的な詩である『エロイーザよりアベラードへ』（1717）等を書きあげた<sup>(7)</sup>。一方、この間、16才の頃に知りあった劇作家ウィリアム・ウィッチャリー（1640-1716）やジョナサン・スウィット（1667-1745）によって文学界や政界の人々とも交流するようになった<sup>(8)</sup>。

その後、ホーマーの翻訳に専念し、ウィリアム三世の時代に国務大臣までつとめ、また、パトロンでもあったサー・ウィリアム・トランブル（1636-1716）の勧めで<sup>(9)</sup>、『イリアッド』（1720）を友人であるトマス・パーネル（1679-1718）の協力を得て完訳した<sup>(10)</sup>。

当時の文筆の世界についてフランスのヴォルテール（1694-1778）は次のように述べている。

実は、取得があると、イギリスでは、国民にとってずっと名誉になるような、ほかの報い方をしているのだ。才能ある人々に対するこの国の人々の尊敬の念は大したものので、取得のある人はそこでは例外なく名利栄達の道を辿るのである。……アデイソン氏は国務大臣であった。ニュートン氏

は王室造幣局長だった。コングリーヴ氏は重職を帯びていたし、プライア氏は全権大使だった。スウィット博士は現にアイルランドで副監督をしていて、そこでは大主教その人よりもずっと尊敬を払われている。ポープ氏の宗教は彼に何かの地位につくことを許さなかったが、それでも彼のホメロスの翻訳が二十万フランになることを妨げなかった。……イギリスにおいて文筆家をもっとも鼓舞激励するものは、彼らに払われる尊敬である。宰相の肖像画はご自身の私室の暖炉の上にしかなくても、ポープ氏のそれは二十軒もの家で私は見かけたものである<sup>(11)</sup>。

この時代においては、文学者が文筆のみで自活することは容易ではなく、ほとんどの文学者は政治家、国王や貴族の庇護を受けながら文筆活動を続けたが、「いかなる王侯貴族の恩義にもたよらずに生活することができたのはホーマーのおかげである」<sup>(12)</sup>とポープ自身も語っているように、ポープは文学界の第一人者としての名誉と原稿料収入による富を手に入れて文学史上初の文学活動のみで生計をたてた作家となったのである<sup>(13)</sup>。

さらに、その後、ロンドン郊外のテムズ川のほとりのトウィックナムに居をかまえ、生活も安定したポープは、道徳的、諷刺的詩——『人間論』(1733-34)、『道徳詩』(1731-35)、コリー・シバー(1671-1757)等の三文作家やこの時代の代表的な古典学者であるリチャード・ベントレー(1662-1742)等をやり玉にあげて攻撃した『愚物列伝』(1742)を書きあげた。そして、ポープの作詩法は二流どころのすべての詩人の共通の形式ともなり、その影響力は世紀末までゆるぐことはなく、彼は1744年に56才で亡くなるまで18世紀前半の文学界の大御所として活躍した<sup>(14)</sup>。

このようなポープについて、ハーンは18世紀前半を代表する人物であり<sup>(15)</sup>、また、特別な意味での天才であるとしているものの<sup>(16)</sup>、英文学で重要なのは作品の内容のためではなく、彼の韻律詩——英雄対(韻)句の詩形——を韻律と考えた場合の完成度の高さであるとしている<sup>(17)</sup>。また、彼の作品については、数はたくさんあるけれど大部分は諷刺詩であり、感情を表現した詩ではなく<sup>(18)</sup>、例えば、『人間論』については道徳的経験の宝庫であるがために価値はないことはないが、詩ではなくて詩の形をした完全な諺の本であり、感情表現や思想(内容)から全く学ぶべきところがないとしているのである。そして、シェークスピアを別とすれば、イギリスの文学者で英語の話の中にしばしば登

場する<sup>(19)</sup>が、高度な詩を書くことができず優れた詩人ではないとしているのである<sup>(20)</sup>。これらの点について考察してみることにする。

## 2. 『人間論』について

1732年から34年にかけて出版されたポープの『人間論』は、彼が「指導者、哲学者、友人」として尊敬した<sup>(21)</sup>ヘンリー・ボリンブルック（1678-1751）に宛てた4つの書簡——宇宙（第一信）、人間自身（第二信）、社会（第三信）、幸福（第四信）——を人間の性質、状態と関連させて説いた道徳的教訓的要素の中に諷刺的要素が加わった思想詩である。

そして、この思想詩の表現にあたって、ポープは詩文を散文ではなくて、韻文、つまり、ヒロイック・カブレットを選んだ理由として、「原理、格言、教訓等はこのような書き方をすれば、読者に最初に深く感銘を与えることができるし、記憶も容易であるし、しかも、散文よりも内容を簡潔に表現できるからである」<sup>(22)</sup>としている。

### 書簡（一）

神の摂理の正しさを立証することを目的とする<sup>(23)</sup>ポープは、我々の住む宇宙について「巨大な迷路であるが地図がないわけではない」<sup>(24)</sup>と述べている。そして、「無限なる英知は可能な体系の中で最善のものを創り出し、すべて充たされていないならば、統一は保てず、上昇するものは正しい順序に従っている」<sup>(25)</sup>として、楽観的な前提を示して次のように述べている。

創造の広大な範囲にわたって、感覚力と知力の階段が上っている。  
下は青虫に群がる数知れぬ虫けらから、  
上は万物の霊長たる人間に至る段階を  
見るがよい<sup>(26)</sup>。

.....

見るがよい。この空、この海、この大地を通じて、  
あらゆるものが生き生きとして、爆発的に誕生している。  
上には進歩的な生命がなんと高くまで進出し、  
周囲はなんと広く、下はなんと深く延びていることか。

存在の巨大な鎖！ それは神に始まり、天のもの、地のもの、天使、人間、けだもの、鳥、魚、虫、眼に見えぬもの、望遠鏡及び顕微鏡のとどこかぬもの、無限から人間（汝）へ、人間から無へ——万一上なる力に我々がつづくとなれば、下なる力も我らにつづくだろう。

さもないと、完全な創造に間隙ができて、階段の一つが折れても、大いなる階段の全体が崩れるのだ。

自然の鎖のどの環を破壊しても、——十番目でも、一万番目でも——鎖は同じように壊れるのだ。

もし、どの組織も順位を守って回転していて、驚異すべき全体にとって等しく重要（必要不可欠）であるならば、その一つに眼に見えないほどの混乱があっても、その組織のみならず、全体の構造が崩れるのだ<sup>(27)</sup>。

ピラミッド型の宇宙の秩序（序列）において、階段の最も上に位置するのは神であり、続いて天使、人間、動物、鳥、魚、虫の順序に連なっており、また、人間の眼に見えない遠くにあるもの、小さなもの、発見されていないものまでも連なっているのである。そして、ポープは宇宙の階段を鎖にたとえ、各々の階段は鎖の輪とみなし、鎖全体——「存在の巨大な鎖」——を「万物の大連鎖」であると述べ、さらに、「一つの真理は明白だ——存在するものはすべて正しい」<sup>(28)</sup>とも述べているように、この鎖のどの階段が壊れても宇宙の秩序（序列）が崩れてしまうと考えているのである。

このように、ポープは宇宙全体における調和を認め、「存在の連鎖」——「人間」は「天使」の下、「動物」の上という「中間者」としての存在である——を肯定し、この思想に基づいて楽観的な見解を示しているのである。

ところで、17世紀から18世紀にかけて、多数の著述家が「存在の連鎖」について主張しており、しかも、この言葉は「聖なる言葉」になっていた<sup>(29)</sup>。とりわけ、連鎖が神から始まり最低級の感覚を備えた生命体に至る最も顕著で決定的に浸透しているのはライブニッツの説であり、彼の思想——充滿、連続、階級性——は18世紀前半になってもまだ十分に力を保持しており、ポープの『人間論』を通じて一般にも広く知れわたるようになった<sup>(30)</sup>。

このように楽天的な態度をとるポープは、人間の傲慢について宇宙には神の

定めた秩序——段階づけ——があり、理屈で物事を考えること——高慢は秩序に背く罪であり、神に逆うことでもあり、宇宙体系そのものを混乱に落しいれることでもあると考えているのである。

さらに、人間の幸福については「人間の幸福——思いあがった心には解らないだろうが——人間以上の行動や思考をしないことである」<sup>(31)</sup>としているのである。

このポーブの見解に共鳴し<sup>(32)</sup>、また、若いころからポーブの詩の愛読者でもあった<sup>(33)</sup>ルソーも『エミール』の中で次のように述べている。

おお、人間よ！ おまえの存在をきみの内部に閉じこめなさい。そうすれば、もはやきみは不幸でなくなるであろう。自然が万物の連鎖のなかできみに割りつけた位置に止まることだ。きみをそこから出させることのできるものは一つもない<sup>(34)</sup>。人間は、あるがままのありように満足しているとき、きわめて強く、人類以上の高みにのぼろうと欲するとき、きわめて弱い<sup>(35)</sup>。

このように、人間は人間にとどまるのが幸福であると説いているポーブは、理神論、科学の時代という思潮にみられる人間の思いあがりに対するアンティテーゼを示しているのである。

## 書簡（二）

ポーブは最初に人間は神と動物の中間にただよう存在——「宙ぶらりんの存在」——であり、従って、偉そうにみえても偉くはないのである<sup>(36)</sup>と述べた後、「科学のあとに従うときは、謙虚こそよき案内者である」<sup>(37)</sup>として、科学に理解を示しているものの、理性への過信をいましめて次のように述べている。

ゆけ、不思議な生物（被造物）！ ひとつの科学の導くところに登ってみるがよい。

地球をはかり、空気の重さをはかり、汐の状態を述べ、惑星にどの軌道を回るかを命じ、昔の暦を正し、太陽を規定してみるがよい。

ゆけ、プラトンとともに最高の浄界（最高天）にかけあがり、  
 第一の真、善、美の世界をつきとめ、  
 あるいは彼の弟子達が歩んだ迷路をぐるぐる回り、  
 感覚をすてることが、神を真似ることだと言ってみるがよい。  
 太陽を真似るために、ぐるぐる首をまわして、東洋の僧侶たちがぐるぐる  
 舞って目まいをおこしたように、  
 ゆけ、永遠の英知に支配の方法を教えてみたらよいだろう。  
 それから我が身にかえて、最近、  
 死すべき人間が自然の法則のすべてを解いたのを見て、  
 人間にしては偉い知恵を持っていると感心して、  
 ニュートンを見世物に使って、ちょうど我々がサルを見世物にするみたい  
 に<sup>(38)</sup>、

地球上の他の被造物よりは確かに高い位置にあるが、最高の位置を占めるものははるかに下に位置する人間は、理性をもちあわせていないわけではないが、偉大な発見をし、自然を数式であらわしたニュートンをも支配しているのは神であり、自分の本分を理解していれば理性を最高のものと考えたことはない。要するに、人間は神にあやつられており、理性を過信してはならず、「分際を知ることが必要だ」としているのである。

さらに、ポープは「人間性の中には、二つの原理が支配する」<sup>(39)</sup>として、次のように述べている。

自愛は人間を動かし、理性は抑える。  
 ひとつは善で、他は悪だとは我々は  
 言わない。  
 それぞれに或いは動かし、或いは治める目的がある。  
 むしろ、その正しい働きにすべての善を、正しくない働きにすべての悪を  
 帰そう。  
 運動のバネである自愛は魂を動かし、  
 理性の調節器はすべてを支配する。  
 自愛がなければ人間に行動が伴わず、  
 理性がなければ動いても目的を達しない<sup>(40)</sup>。

人間を動かすものは自愛（欲望）であり、理性は全体を調節し、抑止力をもっているが、両方とも必要であり、どちらか一方が欠けても目的の達成は不可能であるとしているのである。

そして、「自愛も理性も目指す目的は同じである」<sup>(41)</sup>として、こう述べている。

自愛の様々な型を欲望と呼んでよいだろう。  
本当の、あるいはみかけの善が欲望を刺激する<sup>(42)</sup>。

.....

感情は自己本位だが、その手段が正しければ、  
理性の下に馳せ参じて、当然その保護を受けてよいのだ。  
理性が与えられた感情は、高貴な目的を目指すもので、  
感情一般の価値を高め、美德の名を帯びる<sup>(43)</sup>。

.....

人間はすべて善でもあり、悪でもある。極端はほとんどなく、すべて中途半端だ<sup>(44)</sup>。

つまり、自愛（欲望）と理性は異なった機能を有しており、正反対の方向に働く性質のものであるが、人間がある行為を達成するためには同じ目的に向って働き、人間を最終的には美德へと導くものだというのである。

さらに、ポープは『人間論』の序文においても「一見正反対の学説の両極端の間にカジをとりながら」<sup>(45)</sup>と述べ、「理性は地図で欲望（情念）は突風である」<sup>(46)</sup>と説き、理性ですべてが説明できると思っはならず、情念が出发点であるとして情念の役割を認めて次のようにも述べている。

そうだ、自分の道をまず選ばなければならぬ。  
そこでは、理性は案内者ではなく、護衛者だ。  
主情をすてることなく矯正すること、敵としてではなく、友としてあつかうことだ<sup>(47)</sup>。

.....

最も確実な美德が欲望（情念）からめばえる。  
野性の自然の生气（力）が根に働いているときに<sup>(48)</sup>、

ところで、18世紀のイギリスの思想的な風上は、ジョン・ロック（1632－1704）が『人間知性論』（1690）の中で理性こそ「本来の裁判官」<sup>(49)</sup>であり、また、「あらゆる物事の最後の審判者」<sup>(50)</sup>であると述べているようにこの時代の潮流としては、理性の優位は不動のものだったはずであるが、ポープのこのような主張は、ロックの理神論的哲学を出発点として「情念なくしては、いかなる観念も力ももたない」<sup>(51)</sup>とするデヴィッド・ヒューム（1711－76）の『人性論』（1739）における「理性は情念の奴隷であり、それだけのものであるべきであって、理性は情念に仕え、従う以外に何らかの役目をあえて望むことはけっしてできないのである」<sup>(52)</sup>という主張とも一致しているのである。

### 書簡（三）

「全宇宙はひとつの社会組織である」<sup>(53)</sup>とするポープは、「相互の欲求の上に相互の幸福が築かれている」<sup>(54)</sup>と説いており、我々の住む宇宙についての「存在の連鎖」の思想が愛についてもみられるとしているのである。

我々の世界を見まわすがよい、愛の鎖が、  
 上下（地上と天上）を一つに結ぶさまを見るがよい。  
 形成力のある自然がこの目的に向って働き、  
 個々の原子が相互に近づき  
 となりものを引き寄せ、また、引き寄せられて、隣人を抱きあうように  
 作られ、しむけられているのを見るがよい。  
 次に様々な命を与えられている物質を見るがよい。  
 全体の幸福（善）という一つを中心に向って進むのを。  
 枯死する植物が生命を与え、  
 生命が解体して再び成育するのを見るがよい。  
 すべて死に行くものは、他のものを補充する。  
 （我々は交互に生の息吹きをとめて、死ぬのだ。）  
 物質の海に生まれるあわのように、  
 作られ、壊れて、その海に帰るのだ。  
 一つとして無縁なものはない。各部分は全体につながり、  
 すべてに拡がり、すべてを守る魂は、  
 存在の一つ一つを結びつける、最大のものを最小のものとも

獣は人間のために、人間は獣のためにあるのだ。  
すべては奉仕し、孤立するもの（単独に存在するもの）は皆無だ。  
鎖はどこまでも続き、その末は誰も知らない<sup>(56)</sup>。

さらに、ポーブは「自然の状態は神の治めるところであった」<sup>(56)</sup>として、次のようにも述べている。

自愛と社会愛とは自然の誕生とともに始まり、  
合同（社会的結合）はすべてのもの（万物）を結び、人間を結ぶ絆であった。

当時は思いあがりもなく、思いあがりを助長する技術もなかった。  
人間は動物とともに歩き、樹陰を共有し、食卓も寝床も同じであった。  
殺して衣服や食物を得ることもなかった。  
ひびきわたる森と同じ聖所の中で、  
あるものは等しく、共通の神をたたえた<sup>(57)</sup>。

.....

神の属性は一切の衆生の済度にあり、  
人間の特権は治めて仁を旨としたのだ<sup>(58)</sup>。

.....

生きとし生きる者の半ばを屠って死に至らしめ、  
自然に反いて、うめき声を聞き、  
彼らの種を殺し、自己の仲間を裏切る。  
然し応報の病いは豪者な倣りにつづき、  
殺された血から復讐の激情が起ちあがり、  
人間に対して、さらに残忍野蛮なもの、  
人間を刃向はせたのだ<sup>(59)</sup>。

高慢という罪——「存在の連鎖」における段階づけに反する罪——を犯すことによって、「自然状態」すなわち「神の治世」から立ち去った結果、人間と他の動物を結びつけていた絆である「愛の鎖」は間隔があきすぎて切れてしまったとしているのである。つまり、人間が自然の本能を守っているときには、のどかな平和な時代であったけれども、高慢——理屈で物事を考えること——

理性を働かせ始めると、自然の状態の時には保っていた人間のあわれみの感情——愛——がなくなり、動物を殺したり、また、最後には人間同志の殺しあいが生じたとしているのである。

つまり、自愛は善と悪の両面をもっており、自愛が不正におこなわれると、私的欲望に走る。自愛が公的に正しければ、私的に正しいとしており、ポープは「自愛と社会愛（公的愛）の同一はその意志なのだ」<sup>(60)</sup>と述べて、自愛と社会愛は神の与えてくれた目的であり、これが同一になるのが望ましいとしているのである。

#### 書簡（四）

ポープは「美德のみがこの世の幸福である」<sup>(61)</sup>と説き、人生の目的は幸福の追求であるとしているのである<sup>(62)</sup>。

そして、美德の報酬は心からの喜び——精神がなごむこと——である<sup>(63)</sup>とし、また、富、尊敬、名声、偉大といったような物質的なものや世俗的なものは幸福を見誤らせる<sup>(64)</sup>として次のように書いている。

自然の贈りものは賢明で、その贈りものの中で、  
人間最高の美德を最大の幸福と結びつける。  
人間が幸福になり得る最も明るい希望はまた、  
他人を助ける最も強い動機と結びついている。  
自愛はこのようにして社会愛に、神の愛に推し進められ、  
隣人の幸福を自己の幸福とするようになる<sup>(65)</sup>。

.....

理性と、生命と、感覚の全世界と、  
善意の緻密な世界の中にとらえるがよい<sup>(66)</sup>。

.....

幸福の絶頂は最大の慈悲に通じるのだ<sup>(67)</sup>。

要するに、人間最高の幸福は人間個々の道徳実践なのであり、幸福の、つまり、内的（精神的）美德の、追求が自己愛から大きく社会愛へと高まっていく道であるとしているのである。すなわち、ポープにおいては「正直者は神の最も高貴な作品」<sup>(68)</sup>であり、人間の幸福を世俗的な面や物質的な面におくことは

誤りなのである。

このように、ポープの『人間論』は、この時代のイギリスの精神風土を代表するロックの説やヒュームの情念論などもとりいれてはいるものの、全体の趣旨は、ポープ自身の言を借りるならば、「完全者」である神によって創造された人間は人間の本分をまもり、美徳の体得に努力し、神の摂理を信頼し、現在の世の中を最上のものとしてうけとめ、現実の世の中——神の原初の秩序——をありのままにうけいれ、いかにして幸福を得て生きるかということである。

一方、この『人間論』について思想（内容）的に価値のないとするハーンは、講義にもとづく著作中の「古典時代の散文」において18世紀前半はイギリスの散文が大いに発達し、たくさんのエッセイスト、自由思想家が現われた<sup>(69)</sup>と述べ、思想家としてシャフツベリ（1671-1713）、ポリンブルック、マシュー・ティンダル（1657-1733）、ジョン・トーランド（1670-1722）等の名前をあげている。そのうちのシャフツベリについては名前をおぼえておく程度でよいとしており、ポリンブルックについては今は読む者はいないと述べている<sup>(70)</sup>が、オランダに生まれて、後にイギリスに定住したバーナード・マンデヴィル（1670-1733）については彼の著作『蜂の寓話』を引きあいにだして、彼は人間の野心、利己心、物欲、裏切りといったものが危険なものではなく実際に社会に役立つことを証明した人物であり、社会学者ではないが彼の見解は社会学上の真理を含んでいる<sup>(71)</sup>と述べているのである。

さらに、ハーンはそれに関連して「この世における善の発展は、悪の発展にもとづくところが大きく、悪のない世界は、善の世界ではなく、無の世界であろう」<sup>(72)</sup>と述べ、彼は「悪徳と悪行とを抑制することはできないことを感じとっており」、しかも「悪徳と悪行は社会に役立つものであると認識していた」<sup>(73)</sup>と述べている。

また、「生存競争は社会の進化に貢献する」<sup>(74)</sup>とするハーバート・スペンサー（1820-1903）の説にもとづく道徳を説いているといわれるジョージ・メレデス（1828-1909）の『大地と人間』を、ハーンはとりあげて、それに関連して人間について「善良であっても弱い人間であってはならず、善は弱い者には決しておとずれることはないだろう」<sup>(75)</sup>とか、「人生は競争であり、人類はこの競争（生存競争）に参加しなくてはならず、さもないと必らず亡びてしまう」<sup>(76)</sup>などと述べている。

さらに、ハーンは1881年1月6日付の「アイテム紙」において「もし世の中

が慈善、寛大という衝動に動かされやすいならば、社会構造はこなごなに碎けてしまうであろう。奇妙に思えるかもしれないが、世の中を今日あらしめ、その社会構造を強化しているのは、まさにこの感情の欠如である<sup>(77)</sup>という記事を書いているのである。

ところで、ハーンは19才でアメリカに渡り、1890年に来日するまでの約20年をアメリカで過ごしているのであるが、この時期のアメリカは南北戦争（1861-65）も終り、農業国から工業国へと急速な発展をとげ、科学の進歩も手伝って鉄道や船舶などの交通機関は大陸を結び、さらに、電話や電報の発達にもなって広い国土はせばまっていった<sup>(78)</sup>。また、アメリカの自然主義の作家であるジャック・ロンドン（1876-1916）の“A Daughter of the Snows”の「競争は創造の秘訣であった。闘争は進歩の法則であり、方法であった。世界は強者のために作られ、強者のみがこれを受け継いできた。そこに永久的な公正があった<sup>(79)</sup>」という記述からもわかるように、南北戦争直前に入ってきたダーウィンの進化論がすばやく浸透し、また、これを社会現象に適用し、社会の発展の理論として体系化したスペンサーは、本国であるイギリスよりもアメリカで歓迎されていた。彼の思想は、とりわけ、1880年代において、資本主義経済の競争による自然淘汰（適者生存）を正当化するものとして<sup>(80)</sup>、アメリカの資本主義者——ロックフェラー、カーネギー、ヒル等——の間でもてはやされ<sup>(81)</sup>、彼の著作は爆発的な売れ行きを示したのであった<sup>(82)</sup>。

このような時代に新聞記者としてアメリカの現実の社会をありのままに見たハーンは、スペンサーの思想の信奉者となり<sup>(83)</sup>、それに反するようなポーブの『人間論』を内容的に価値がないとみなしたものと思われるのである。

### 3. ポーブの一般的評価とハーンの文学観

18世紀前半のイギリス文壇の大御所であったポーブは、宗教的な偏見や身体的なハンディを背負っているにもかかわらず、早くから詩才を発揮して文学界で認められていた。彼は感情主体の作家ではないけれども、ロマン的な作品も書きあげており——古典主義とロマン主義の文学的な業績を残し、同時代の作家のみならず後世の作家にも大きな影響を与え、しかも、イギリス文学史上初めての職業作家でもあった。

また、真の詩人とは「人の心をゆさぶるものでなければならない<sup>(84)</sup>」とする

ポーブは、ロマン主義的な作品——例えば、『ウインザーの森』『エロイーザよりアバラードへ』——を書きあげてもいるし、『批評論』の中では、変則と逸脱の美——ロマン主義が重視するもの——に対して礼賛しているところが見られるのである<sup>(85)</sup>。

このようなポーブでもあったにもかかわらず例えば、ロマン主義の立場にありながら、同時に古典主義の教養を身につけていた<sup>(86)</sup>マシュー・アーノルド(1822-88)は「真の詩とドライデン、ポーブおよびその一派全員の詩との相異は、簡単に言えばこうである。彼らの詩は機知において構想され、作られるが、真の詩は魂(性格)において構想され、作られる。この二種類の詩は大きく違う」<sup>(87)</sup>と述べている。

また、田園生活をうたった『詩集』などにより18世紀後半の詩壇を代表するウィリアム・クーパー(1731-1800)はポーブの詩の価値を認めながらも「ポーブはあまりにも敏感であったがために詩というものを機械的なものにしてしまった」<sup>(88)</sup>と述べている。

しかし、18世紀後半の文壇の大御所であったサミュエル・ジョンソン(1709-84)は「ポーブの詩は生存中と同様に死後も大へん礼賛されたし」<sup>(89)</sup>また、ポーブが詩人でなければ、一体どこに詩は見いだされるか」<sup>(90)</sup>と述べてポーブを高く評価し絶賛しているのは当然であるとしても、イギリスのロマン主義運動において、ジョージ・ゴードン・バイロン(1788-1824)、パーシー・ビッシュ・シェリー(1792-1822)と共同で新聞を発行し、その上、ジャーナリストとして重要な役割を果たした<sup>(91)</sup>リー・ハント(1784-1859)はポーブについて「すばらしい才人であり、諷刺家でもあり、絶妙な良識の持主であったと同時に真の詩人であった」<sup>(92)</sup>と述べている。また、ハーンが形式においては古典主義的であるが、感情と表現と表現方法は完全にロマン主義的である<sup>(93)</sup>としているバイロンは現代を英詩の全盛時代と考えるのも大きな誤りであるとしながらも「ポーブを正当に評価できるかどうか、趣味を試す試金石になる」<sup>(94)</sup>と述べている。なお、ポーブを「詩語」の元祖であるとして非難したウィリアム・ワーズワス(1770-1850)も「ポーブは韻文を書く力のみによってありふれた常識を興味あるものにし、時には強い感情の外観までも付与した」<sup>(95)</sup>と述べている。また、18世紀英文学の講義の際に夏目漱石が参考とした<sup>(96)</sup>イギリスの思想家であるレズリー・ステイーヴン(1832-1904)は、ポーブについて多少気の利いた語呂合せ作家にすぎないとみなす者もいるが、「私はこの時代

の詩的精神の典型的な代弁者とみなし、真の詩人として認めるが、そのどちらが正確であるにせよ、この時代の思想をおどろくほど完全に反映していることに議論の余地はない<sup>(97)</sup>として真の詩人として認め、その上、「注目すべき作品として、宗教的な信条の詩的表現である『人間論』は最高の出来ばえではないにしても野心的な作品であり、ライブニッツの著名な作品と同様に一つの『弁神論』たらしめた」<sup>(98)</sup>と述べ、『イリアッド』については『もし純粋な英語の詩として読めば、全体を通して生き生きとしたスタイルの力強さによって断然他の訳の追従を許すものではない』<sup>(99)</sup>としているのである。そして、東京帝国大学でハーンの後任として社会状況との関連の中で英文学を講じた<sup>(100)</sup>夏目漱石は、ポープについて「『エロイーザよりアバラードへ』、『不幸な婦人に』といった作品をとりあげて、ロマン的な作品も書きあげることができたとして<sup>(101)</sup>、真の詩人ではないとしながらも、彼の立場に身を置いて考えてみると、彼独得の分野において十分に成功を収めており、時代の圧迫を受けなかったら、真の詩人として十分に成功した人であろう<sup>(102)</sup>と述べ、時勢におされて散文的な詩人になってしまったとしているのである。

このように、ポープに関しては彼の詩を真の詩ではないとして全く評価しない文学者や批評家もいるものの立場を異にする思想家や詩人、文学者の中にも、彼を詩人として認め、作品を評価している者もいるのである。

一方、ハーンは文学を「感情と情緒の表現」<sup>(103)</sup>として教えており、詩を批評するときは「詩人が生みだす感動の質と力を説明すること」<sup>(104)</sup>に努力し、「感動的な生命は知的な生命（理性）より深くても古い」<sup>(105)</sup>とし、詩人は「人間のうちで感動的なものを最高度に代表している」<sup>(106)</sup>と考え、「詩人の真の評価は言葉を歌わせること」<sup>(107)</sup>にあると述べている。つまり、ハーンによれば、詩とは「たとえその韻文がいかにも正確であったとしても、たんに韻文を綴ることではない。韻文によって人々の心と精神を動かすこと」<sup>(108)</sup>であり、「ただ正確なだけの韻文は真実の詩ほどその名に値しない」<sup>(109)</sup>のものであって、「韻文だけの形式だけに限られるものではなく、美しい散文で書かれた詩もあるだろう」<sup>(110)</sup>とも考えているのである。

ハーンのこのような見解からみると、ポープに対する評価が低いのは当然のことと思われるのである。

その上、ハーンは詩を以下のように三種類に分類している<sup>(111)</sup>。

- (1) 最も優れている種類の詩歌とは、詩句ないしは形式と表現されている情

緒とがともに見事で、この上なく素晴らしいものを言うのである。(完璧な詩)

- (2) 二番目に重要となるのは、情緒や感情が主たる関心事であって、形式はただ第二義的にしか考慮されていない種類の詩である。(二流の詩)
- (3) 三番目のものは、一番価値の低い詩歌の分類に入るが、形式がすべてであって情緒や感情が必ずや形式の下位に置かれている詩である。(劣等の詩)

そして、三番目のものについて、ポーブや古典派の人々の作品が最もよく代表しているとしており、詩の状況については、感情や思想の方向に向わず形式重視に向っており、時勢はよくない<sup>(112)</sup>と述べてもいるのである。

また、ハーンは「諷刺詩を好まない」<sup>(113)</sup>と述べ、その理由を「人に苦痛を与えるために書かれ、悪意を満足させるために書かれたものは真の芸術——高尚な文学——とは言えないのではないかと思う」<sup>(114)</sup>と述べて、諷刺詩に対して批判的な態度をとっているのである。

さらに、詩格、韻律、韻文について、ハーンは「完璧な詩格や韻律は、詩の効果を助長させる。しかし、それらは作品の美しさにとって、必ずしも必要不可欠とは言えない」<sup>(115)</sup>と述べ、「短かい韻文の作品が、かなり多くの意味を含んでいたり、あるいはたまたま非常に巧みに組み立てられているからといって、……本物の詩と呼びうると思ってはならない。ただ器用さ、巧みさ、言い回しなどによって人をおどろかせる散文は、ほとんど何の価値ももっていない」<sup>(116)</sup>としているのである。

つまり、ロマン主義の伝統に共感を示し、古典主義的傾向をしかたなく必要なものであるが古典主義文学に共感を覚えたことがなく<sup>(117)</sup>、すぐれた価値ある作品は習慣や規則に反したところがある<sup>(118)</sup>と述べているハーンは、古典派の詩人達が作詞において重視するもの——形式、規則に従って正確に書かれた詩(韻文)ではなくて、感情、情緒に訴えかけることによって書く詩(韻文)——ハート(heart)で書く詩(韻文)を評価しているのである。

さらに、シェークスピア論において、単に倫理的な目的のために書かれた作品は非芸術的で不満足なものであるとして否定する<sup>(119)</sup>ハーンは、偉大なる詩・小説・劇等が道徳的意図のために書かれてはならない。道徳的意図はひとりの人間の個人の理想的な行動に過ぎず、個人により、社会的・宗教的情况によって変わるもので、個人の道徳観は偏ったものになりやすい。このような

狭い思想は文学本来の目的とは全く相容れないものである。というのは文学は人生を反映したものであるが、人生は決して一つの色や一つの形から成り立っているものではなく様々な形や色をもっており、しかも絶えず動くものである。人生はひとつの道徳を意味せず相異なるかつ相対立させる道徳を意味するものである。もし我々がある道徳的意図のために詩を書いても、優れたものを書けるかもしれないが、偉大な詩はおそらく書けないであろうと述べてもいるのである<sup>(120)</sup>。

## おわりに

ハーンとポーブの『人間論』とのかかわりをみてみると、ポーブの『人間論』にみられる思想——美徳の実践、物質的な価値よりも道徳的な価値の強調、博愛、慈愛といったものの重視、また、完全者である神の摂理を信頼して現在の世の中を最上のものとして受け入れることを説いた楽観的な見解——とスペンサーの信奉者であるハーンの見解——人間は善だけでは生きていけず、人生は競争であり、強い者が勝つ、つまり、自然淘汰は社会の発展につながるというスペンサー思想の肯定——には対立する部分が見いだせるのである。

また、詩観について、ハーンとポーブとの比較考察をしてみると、ハーンの詩観は詩人とは最高度に感情的なものを表わした人間であるとし、感情と情緒を詩の形式よりも上位に位置づけており、ロマン主義の立場を支持するものであるが、一方、ポーブは感情や情緒よりも形式重視の詩、つまり、古典派の詩人の作詩法によって詩を書いているのであり、両者には明らかに対立する部分が見いだせるのである。

要するに、ハーンの思想観や文学観（詩観）がポーブと異なっており、ポーブはハーンの意味する高度な詩——感情・情緒表現の豊かな詩——を書けなかったので、ハーンはポーブを優れた詩人としなかったものと思われるのである。

しかし、一方で「韻律を正しく使っているだけが詩の条件ではない」としているが相手を論評する場合にはその人の史的位を考慮することに努めた<sup>(121)</sup>ハーンは、ポーブが早くから詩才を発揮して、形式重視の完成度の高い、しかも、美しい韻律の詩を書いて人々に認められたこと、つまり、カプレットこそがポーブにとって命である<sup>(122)</sup>とセイツベリーが述べているように、英雄対

(韻) 句の完成者であること、さらに、感情を本領とする詩人ではないにもかかわらず抒情詩も書きあげたこと、また、ハーン同様に正規の教育を受けていないこと、社会的差別や身体的ハンディを背負っていたにもかかわらずイギリス文学史上はじめて文学者として経済的に自立したことやイギリス国内では有益な研究者ともなっている<sup>(123)</sup>ことなどによって18世紀前半の代表的な人物としたものと思われるのである。

#### 〈注〉

- (1) J. マルガン/D. M. デイヴィン (成田成寿訳) 『イギリス文学史』, 八潮出版, 1991年, 112-13頁。
- (2) John M. Aden "Pope's Once and Future Kings", The University of Tennessee Press, 1978, pp. 3-23.  
Alexander Pope "Imitations of Hoarce" (Edited by John Butt), New Haven, 1969, p. 168.  
Leslie Stephen "Alexander Pope", AMS Press, 1968, pp. 3-4.
- (3) W. J. Courthope, C. B. "A History of English Poetry", Macmillan, 1925, p. 157.
- (4) Joseph Spence "Observations, Anecdotes, and Characters of Books and Men" (Edited by James M. Osborn), Oxford University Press, 1966, p. 12.
- (5) "A History of English Poetry," p. 157.
- (6) David Faxon "Pope and the Early Eighteenth Century Book and Trade" (revised and edited by James McLaverty), Clarendon Press, 1991, pp. 18-9.
- (7) 『イギリス文学史』, 114頁。
- (8) "Poet's Once and Future Kings," pp. 72-6.  
"Alexander Pope", p. 11, 96.
- (9) "Observations, Anecdotes, and Characters of Books and Men", p. 31.  
"Alexander Pope", p. 10.
- (10) "A History of English Poetry", pp. 187-88.
- (11) ヴォルテール (林達夫訳) 『哲学書簡』, 岩波書店, 1980年, 193-94頁。
- (12) "Imitations of Hoarce", p. 169 (68-69).
- (13) Bonamy Dobrée "Alexander Pope" Oxford University Press, 1966, p. 91.
- (14) レズリー・スティーヴン (中野好之訳) 『18世紀イギリス思想史』(下), 筑摩書房, 1985年, 234-35頁。
- (15) Lafcadio Hearn "A History of English Literature" (Edited by R. Tanabe, T. Ochiai, I. Nishizaki), Hokusedo Press, 1958, p. 262.
- (16) Ibid., p. 266.
- (17) Ibid., p. 274.
- (18) Ibid., p. 270.
- (19) Ibid., pp. 274-75.
- (20) Ibid., pp. 276-77.
- (21) Alexander Pope "An Essay on Man" (edited by Maynard Mack), Yale University Press, 1964, pp. 7-8.

"Observations, Anecdotes, and Characters of Books and Men", p. 124.

- (22) "An Essay on Man", pp. 7-8.
- (23) Ibid., I. 16.
- (24) Ibid., I. 6.
- (25) Ibid., I. 43-48.
- (26) Ibid., I. 207-210.
- (27) Ibid., I. 233-250.
- (28) Ibid., I. 294.
- (29) Arthur O. Lovejoy "The Great Chain of Being", Harvard University Press, 1964, p. 184.
- (30) "The Great Chain of Being", p. 184.  
E・カッシーラー (原好男訳) 『18世紀の精神』, 思索社, 昭和54年, 67-70頁。
- (31) "An Essay on Man", I. 123-172.
- (32) 『18世紀の精神』, 67-70頁。
- (33) Hary M. Solomon "The Rape of the Text", The University of Alabama Press, 1993, p. 1.
- (34) ルソー (樋口謙一訳) 『エミール』 (上), 白水社, 1986年, 86頁。
- (35) 同書, 82-3頁。
- (36) "An Essay on Man", II. 3-7.
- (37) Ibid., II. 42.
- (38) Ibid., II. 19-34.
- (39) Ibid., II. 53.
- (40) Ibid., II. 54-62.
- (41) Ibid., II. 87-88.
- (42) Ibid., II. 93-94.
- (43) Ibid., II. 97-100.
- (44) Ibid., II. 231-232.
- (45) Ibid., p. 7.
- (46) Ibid., II. 108.
- (47) Ibid., II. 161-164.
- (48) Ibid., II. 183-184.
- (49) 『世界の名著』27, 中央公論社, 昭和43年, 184頁。
- (50) 同書, 185頁。
- (51) W・J・ベイト (小黒和子訳) 『古典主義からロマン主義へ』, みすず書房, 1993年, 189頁。
- (52) 『世界の名著』27, 514-15頁。
- (53) "An Essay on Man", III. 1-3.
- (54) Ibid., III. 109-112.
- (55) Ibid., III. 7-26.
- (56) Ibid., III. 148.
- (57) Ibid., III. 149-156.
- (58) Ibid., III. 159-160.
- (59) Ibid., III. 163-169.
- (60) Ibid., III. 318.

- (61) Ibid., IV. 310.
- (62) Ibid., IV. 1-4.
- (63) Ibid., IV. 167-169.
- (64) Ibid., IV. 286-308.
- (65) Ibid., IV. 349-354.
- (66) Ibid., IV. 357-358.
- (67) Ibid., IV. 360.
- (68) Ibid., IV. 248.
- (69) "A History of English Literature", pp. 284-85.
- (70) Ibid., p. 285.
- (71) Ibid., p. 286.
- (72) Lafcadio Hearn "Some Strange English Literary Figures of the Eighteenth and Nineteenth Centuries", Hokuseido, 昭和2年, pp. 30-1.
- (73) Ibid., p. 31.
- (74) ジェイ・ラムネー (山田隆夫訳) 『スペンサーの社会学』風媒社, 1972年, 214頁。
- (75) Lafcadio Hearn "Interpretations of Literature", Vol. I, Dodd, Mead and Company, 1915, p. 378.
- (76) Ibid., p. 373.
- (77) Lafcadio Hearn "Buying Christmas Toys and Other Essays (edited by I. Nishizaki), Hokuseido Press, 1939, p. 40.
- (78) 法政大学教養所「紀要」103号, 外国語学・外国文学編, 1998年, 83頁。
- (79) Jack London "A Daughter of the Snows", Arco Publications, 1963, p. 47.
- (80) Richard Hofstadter "Social Darwinism in American Thought", Beacon Press, 1955, pp. 4-5, 38.  
大橋健三郎他『総説アメリカ文学史』, 研究社, 1975年, 195頁。
- (81) "Social Darwinism in American Thought", p. 45.
- (82) Ibid., p. 34.
- (83) (78)に同じ。
- (84) "Imitations of Hoarce", p. 225.
- (85) Alexander Pope (矢本貞幹訳) "An Essay on Criticism", 研究社, 昭和42年, 13頁。
- (86) "Interpretations of Literature", p. 23.
- (87) Matthew Arnold "An Essay in Criticism", AMS Press, 1970, pp. 69-70.
- (88) "A History of English Poetry", p. 186.
- (89) "Boswell's Life of Johnson" II (Oxford Edition), p. 251.
- (90) Samuel Johnson "Lives of the English Poets" (II), p. 344.
- (91) "A History of English Literature", p. 555.
- (92) Leigh Hunt "Wit and Humour", Folcroft Library Editions, 1972, p. 260.
- (93) "Interpretations of Literature", p. 23.
- (94) 宮崎孝一 (訳) 「バイロン」『英米文学ハンドブック—『作家と作品』3, 研究社, 昭和31年, 28-9頁。
- (95) ワーズワス・コールリッジ (宮下忠二訳) 『抒情歌謡集』, 大修館, 1972年, 246頁。

- (96) 夏目漱石『文芸評論』(上), 岩波書店, 1996年, 68頁。  
 (97) 『18世紀イギリス思想史』(下), 226頁。  
 (98) 同書, 227頁。  
 (99) “Alexander Pope”, p. 71.  
 (100) 『文芸評論』(上), 54-5頁。  
 (101) 『文芸評論』(下), 175-79頁。  
 (102) 同書, 209頁。  
 (103) 拓殖大学語学研究所『語学研究』78号, 平成7年, 19頁。  
 (104) Elizabeth Bisland “The life and Letters of Lafcadio Hearn” Vol. II, Houghton Mifflin Company, 1906, p. 481.  
 (105) Lafcadio Hearn “Hints and Echoes of Japanese Inner Life”, Charles E. Tuttle, 1972, p. 11.  
 (106) Lafcadio Hearn “Life and Literature” (Compiled with Notes by R. Tanabe), Hokuseido, 1925, pp. 19-20.  
 (107) “A History of English Literature”, p. 445.  
 (108) “Life and literature”, p. 16.  
 (109) Ibid., p. 18.  
 (110) Ibid., p. 20.  
 (111) Lafcadio Hearn “On Poetry”, Hokuseido, 1934, p. 1.  
 (112) (111)に同じ。  
 (113) “A History of English Literature”, p. 235.  
 (114) Ibid., p. 235.  
 (115) “On Poetry”, p. 6.  
 (116) Ibid., p. 14.  
 (117) “Interpretations of Literature”, p. 17.  
 (118) Ibid., p. 19.  
 (119) Ibid., p. 8.  
 (120) Lafcadio Hearn “Lectures on Shakespeare”, Hokuseido, 1928, pp. 47-8.  
 (121) “A History of English Literature”, pp. 261-65.  
 (122) George Saintsbury ‘Pope and the Later Couplet’ “History of English Prosody” Vol. II, Macmillan, 1908, p. 447.  
 (123) (115)に同じ。

#### 〈参考文献〉

- (1) E・L・McAdam, Jr. “Johnson and Boswell”, Houghton Mifflin Company, 1969.  
 (2) James L. Clifford and Louis A. Landa “Pope and his Contemporaries”, Octagon Books, 1978.  
 (3) Dustin H. Griffin “Alexander Pope: The Poet in the poems”, Princeton University Press, 1978.  
 (4) Wallace Jackson and R. Paul Yoder “Critical Essays on Alexander Pope”, G. K. Hall and Co., 1993.  
 (5) Lytton Strachey “Pope”, Cambridge at te University Press, 1925.  
 (6) 加納秀夫『英詩と近代的ヒューマニズム』, 研究社, 昭和34年。

- (7) 朱牟田夏雄編『18世紀イギリス研究』, 研究社, 昭和46年。
- (8) 渡辺正雄編著『科学と英文学』, 研究社, 昭和37年。
- (9) 渡辺正雄編著『アメリカ文学における科学思想』, 研究社, 昭和49年。
- (10) 中村英勝『イギリス議会史』, 有斐閣, 昭和34年。
- (11) E・ケアンズ (聖書図書刊行会訳)『キリスト教会史』, 聖書図書刊行会, 1957年。
- (12) 酒井善孝『ボウブ』, 研究社, 昭和55年。
- (13) 村上至孝『イギリス新古典主義の詩』, 研究社, 1973年。
- (14) 内多毅監修, 杉本龍太郎, 深沢俊, 内田能嗣編『イギリス文学展望』, 山口書店, 1992年。
- (15) 鈴木善三『イギリス諷刺文学の系譜』, 研究社, 1996年。
- (16) ルネ・ブーヴレス (橋本由美子訳)『ライブニッツ』, 白水社, 1996年。
- (17) 宮崎芳三, 水越久哉『イギリス文学者論—過渡期としての第18世紀』, 松蔭女子学院大学学術研究会, 1991年。
- (18) 『ラフカディオ・ハーン著作集』, 恒文社。

尚, Alexander Pope "An Essay on Man" (Edited by Maynard Mack), Yale University Press, 1964年の邦訳は上田勤訳『人間論』(岩波書店, 昭和25年)をほとんど使用させていただいた。また, 引用文のなかには先行研究者の原書の訳文をそのまま使用させていただいたものもある。